

## 【論文】

## 建築と手仕事（I）～大工の作品と作風～

Architecture and Carpenter's Work (Part1)  
～ Carpenter's Work and Architectural Style～

佐藤 正彦

Masahiko SATO

**Abstract:** This thesis described on the Architectural style and works by the carpenter.**Keywords:** carpenter, architectural style, munofuda, Shinto Shrine Buildings, Edo period,

## 目次

- 第1章 頭取大工小八重平兵衛道義の作品と作風  
第2章 大工松浦藤右衛門の作品と作風

## 第1章 頭取大工小八重平兵衛道義の作品と作風

宮崎県南那珂郡南郷町榎原に榎原神社がある。神殿は拝殿と石の間を伴う権現造を呈す。社殿は宮崎県指定重要文化財(昭和58年1月21日指定)である。建立年代は寛政10年(1798)で、その時の置札に「頭取大工小八重平兵衛 盛大工比江嶋奎治、河野次左衛門、合番匠比江嶋駒治」の他大工が52名記されている。

榎原神社境内には本社の他に、摂社桜井神社があって、本社と同じように、拝殿、石の間、本殿と半間の造合いを介して屋根が続く本殿がたち、神殿内部に1間社流造(側面2間)の厚板葺きの宮殿がある。この宮殿を含めて、桜井神社社殿全体も寛政10年(1798)に建立されたことが、置札から判明する。その置札によると、「棟梁小八重平兵衛道義」と記す。調査の結果、小八重平兵衛道義が、寛政10年(1798)に榎原神社社殿と摂社桜井神社社殿を頭取大工(大工棟梁)として建立したものと推測されるので、この2社を比較して、その作風を明らかにする。<sup>1)</sup>

1、榎原神社は万治元年(1658)に鶴戸神宮を勧請したのが創始と伝えられる。したがって、鶴戸神宮の祭神天照大神、天忍穗耳尊、瓊々杵尊、彦火々出見尊、鵜鷲草葺不合尊、神日本磐余彦尊の6柱を祀る。

榎原神社は明治初年の神仏分離令が公布されるまで、近世時を通じて「榎原山大権現」と称していた。

しかし、神仏分離令発布後明治元年(1868)に「榎原神社」と改称された。現在の社殿は置札によって、寛政10年(1798)に再建されたことが分かる。置札には、具体的な建物名は見られないが、彫刻名が十種程記され、その彫刻と現存社殿の彫刻が合致する。したがって、現存社殿の建立年代が彫刻の内容から判明する珍しい例となっている。

それらの彫刻は大工でなく、彫物(細工)師によって造られたらしい。その上、社殿を造営した大工、鍛冶、塗師などの建築工匠達の中に、飢肥藩の御用建築工匠達が含まれていることが19世紀の資料によって推察される。

また、現存社殿の形式も、双び堂や密教系寺院建築、特に御影堂を思わせる独特な形式を呈する。しかも、この社殿形式は管見によれば、全国でも類を見ないものである。

そこで、本稿では、榎原神社社殿の紹介と、社殿様式成立の理由を考察すると共に、寛政10年再建時の建築工匠の系譜と、その実態を明らかにする。

ところで、榎原神社に関する研究は管見による限りほとんどない。『日向地誌』や『宮崎県史蹟調査』に若干記述されているが、いずれも地誌の域を出ていない。その上、両者とも社殿の彫物や建築工匠に関する記述は見当らない。

## 2、榎原神社社殿の沿革

榎原神社は寿法院(神女内田満寿子)が第3代飢肥藩主(伊東家27第20代)伊東大和守祐久(茲雲公)に「榎原は鶴戸神霊示現の地である。宜しくその神霊を迎え、東西に之を奉斎すべし」との建言によって万治元年(1658)今の地に勧請されたと伝えられ

\* 建築学科

る。内田満寿子が進言したのは明暦2年(1656)らしい。

内田満寿子は串間市大東外行(旧秋月藩領)の住人内田外記の娘で、元和6年(1620)生まれと伝えられている。内田外記は元秋月氏の家臣で、元和8年(1622)満寿子3歳の時、現在の南郷町榎原字石之元に転住した。満寿子は幼少より鶴戸神宮を尊崇し、寛永17年(1640)9月8日鶴戸神宮参籠の翌9日の帰途、俄に神気がかりの身となったと伝えられる。そして、種々の奇言、妖言、あるいは奇跡を示したので、忽ち遠近の大評判となり、世人榎原の神女と称し、多数の信者がその門に蟄集したといわれる。

内田満寿子は榎原神社創建後、神社に奉仕していたが、寛文10年(1670)3月16日50歳で病没すると、摂社桜井神社として祀られたという。それが現在、本殿の西南に東面してたつ。

榎原神社社地は旧貴雪山地福寺(真言宗)に隣接する。旧地福寺は明治初年の神仏分離令によって廃寺になり、現在建物などはない。しかし、資料によれば、寛永20年(1643)3月18日に地福寺地蔵堂が建立されたらしい。そして、地福寺は中世から何らかの形で存在していたものと推察される。

榎原神社社殿が建立されてからは榎原神社は地福寺の鎮守社、地福寺は榎原神社の神宮寺のような関係を保ったらしい。そのため、近世時榎原神社は地福寺の別当(社僧)によって、維持されてきたようである。明治初年、神仏分離令発布後の榎原神社初代祠掌は旧地福寺の僧侶豊島眞森である。

ところで、榎原神社社の「御影堂」が宝永4年(1707)に建立されている。このことは寛政10年の榎原神社社殿が密教系寺院建築を思わせる形式であるが故に注目される。

「御影堂」は真言宗寺院で宗祖空海の「御影」を安置する堂である。さきにふれたように榎原神社は真言宗の旧地福寺と関係深いため、これが旧地福寺の「御影堂」であることはまず間違いあるまい。当時の「御影堂」の規模や形式は不明であるが、慶長11年(1606)に建立された金剛寺御影堂(大阪府河内長野市天野町・真言宗・国指定重要文化財)は平面構成の点で榎原神社社殿に類似する。すなわち、正面4間、側面4間、宝形造、正面向拝1間、背面向拝2間、檜皮葺であるが、平面構成は、身舎正面より第2と3の柱筋に結界を設け、後2柱間を内々陣とする。天井も小組格天井を張るが、外陣・内陣・内々陣と高さに変化をもたせて張る。この平面構成は榎原神社社殿の成立を考える上で、看過できない。

仮に、宝永4年建立の「御影堂」がこの形式に酷似していたとすれば、寛政10年に榎原神社の現社殿を建立する際、「御影堂」に酷似させて造った可能性も考えられるからである。

それでは、次に屋根の相違が問題になろう。そこで、思い出されるのは八幡造社殿である。八幡造社殿は前殿と後殿の幅(桁行)が同一で、1間の造合を設けて、前殿・後殿の切妻造屋根の平側を接している形式である。が、柞原八幡宮本殿(大分市大字八幡)のように平面的にも構造(架構)的にも明らかに八幡造にもかかわらず、前後の棟の中央部を繋いで、「エ」字形にしたものが見られる。したがって、榎原神社社殿も平面的には「御影堂」に酷似させ、屋根は後にふれるように拝殿が入母屋造ではあるが、八幡造に影響されたものとも考えられよう。

ところで、現存社殿が建立された際の寛政10年の置札によれば、関係した建築工匠は大工56名、木挽22名、塗師13名、絵師3名、鍛冶10名、屋根師6名、左官4名、穴太19名、檜屋1名、植物師3名、瓦屋3名などである。そして、総工事費は「銀高60貫751文目5分8厘」で、工事は寛政9年3月16日から翌寛政10年4月16日までの約1年間1ヶ月間かかっている。

寛政10年時、大坂における筑前米の相場が1石当り銀58.8~59.5匁であったので、総工事費は筑前米に換算しておよそ1,000石余りで、2,500俵になる。現在、標準米を10キログラム(約7升)当り4,000円とすると、実に5,700万円以上の額に相当する。

#### 4、榎原神社社殿の構造形式

榎原神社社殿は、前述したように屋根については八幡造の影響が大きいと思われるが、拝殿・石の間・本殿(宮司の呼称による)が一体となり、棟を「エ」字形に造るいわゆる権現造社殿の形式を呈する。

社殿の構造形式は拝殿が正面5間、背面3間、側面1間、入母屋造、千鳥破風付き、向拝1間、唐破風造、石の間が拝殿と本殿に接続し、正面3間、側面1間、切妻造、妻入、本殿が石の間に接続し、3間社両流造、いずれも銅板葺、極彩色である。

当社の拝殿は切石雨葛2段の基壇上にたち、身舎の四面取り角柱を切目・内法長押、頭貫(正面中央間と背面は虹梁型頭貫)で固め、組物は拳鼻付き平三斗とし、墓股を中備とする。因に、組物に特色が見られ、後に記すように内側出組で、実肘木内側に拳鼻を付け、外側は実肘木、杵肘木とも頭貫木鼻と同じ絵様線型とする。軒は2軒、角繁垂木で、妻飾は木連格子である。正・側面には擬宝珠高欄付

き切目縁を付ける。正面中央間は戸納めを付けて舞良戸を引き込み、両脇・両端間は腰に彫物を飾り舞良戸引違いとし、かつ両側面も引違い舞良戸、背面も格子戸引違いとする極めて開放的な建物である。内部は内法長押を廻し、板張りの床に吹き寄せ棧を付けた舟底天井とし、出組で回縁を支える。向拝は礎石から礎盤を造り出した上に几帳面取り角柱をたて、水引虹梁を渡し、柱頭に手挟付き連三斗（大斗と連斗は皿斗）を組み、墓股を中備とする。肘木には水繰がつく。身舎柱とは海老虹梁で繋ぐが、その虹梁木鼻がお化け（後に記す「牡丹鼻」と呼ぶ）のようであったり、菖蒲桁の内側先端に龍頭を付けるなど、かなり賑やかな趣をもつ向拝である。菖蒲桁は水引虹梁上に皿斗をおき、杵肘木を長肘木とし、向拝柱筋より二斗内側で支えられている。

石の間は、正面角柱、背面円柱で、それぞれ拝殿の背面柱、本殿の正面柱となっている。両側のみ切目長押を付け、内法長押と虹梁型頭貫を巡らす。柱頭に出組斗拱を置き、格天井の廻縁を支える。そのために、大斗上に45度坂の肘木を組み、先端に鬼斗を置く。中備は墓股である。内部は内法長押を廻し、各柱を繋虹梁で結ぶ。床は拭板敷き、天井は格天井である。格天井は絵入りで、斗拱など極彩色である。繋虹梁上には中央に出組、その両側に九曜紋付き墓股を配す。正面の板支輪は紗綾形紋、その他は菱紋などを描く。正・背面はそれぞれ拝殿背面、本殿正面に当り、格子引違い戸、両側面に舞良戸引違い戸をたてる。

さて、本殿は切石雨葛1段の基壇上にたち、身舎の円柱（床下八角柱）を切目・腰・内法長押、頭貫で固める。切目長押と腰長押は背面のみ小脇柱まで延びている。組物は出組で、中備に墓股を配す。軒は2軒、角繋垂木とし、妻飾は二重虹梁に斗・実肘肘、破風打合せに彫物の懸魚を吊る。両側は高欄付き切目縁が付く。正面に格子引違い戸を、右側面前端の間に定木縁付き観音開き片引き戸を、左側面前端の間に片引き戸を各々構える以外は横板壁とする。内部は内・外陣に分かれ、床は板張りで内陣を框1段高め、天井は格天井仕上げとなっている。内陣は横板落とし込みで3つに仕切られ、それぞれに宮殿を安置する。内陣各柱は虹梁型頭貫を付け柱頭に出組を置き、中備に墓股を配す。内・外陣境に建具はない。柱頭より上部は極彩色が施されている。但し、天井板は白色、格縁は黒色である。本殿は両流造である。しかし、屋根が本殿・石の間・拝殿と1体となっているため、そのみを見ると権現造によく似ている。しかしながら、内部形式の点から眺めると、

拝殿から本殿まで正面の幅が同一であり、拝殿が舟底天井、石の間と本殿がそれぞれ結界を設けた格天井仕上げでかつ床の高さも本殿の奥の間のみ框1段高くする手法をとるので、密教系本堂や古代の双び堂をも連想させるユニークな建物である。この一連の建物は寛政10年以降、拝殿擬宝珠金物銘に「天保十三壬寅年極月 富寺第十五世良阿代」と見えるので天保13年（1842）及び明治21年、同40年、昭和4年、同48八年などに修理が行われている。

4、摂社桜井神社は拝殿と本殿が半間の造合いを介して屋根が1体となり、入母屋造妻入りとなっている。

拝殿は正面3間、側面2間、入母屋造、妻入りで向拝1間が付く、銅板葺きである。

榎原神社摂社桜井神社拝殿は面取り角柱を切目・内法長押、頭貫で固め、柱頭に三斗・笹繰付杵肘木を組み、前から1間おきに拳鼻を付ける。中備には墓股を配し、軒は1軒で吹寄せ角垂木とする。妻飾りは木連格子である。正面と両側面には擬宝珠高欄付き切目縁が付く。正面中央間は戸納めのある両引き格子戸をたて、両脇間は板戸嵌め殺しとする。造合い背後は中央に中柱をたてて2分し、背後を石の間とする。

向拝は礎石より造り出した礎盤上に几帳面取り角柱をたて、水引虹梁を渡し、柱頭に手挟付き連三斗（連斗なく大斗皿斗）を組み、墓股を中備（「庵木瓜」紋）とする。身舎柱とは海老虹梁で繋がれ、海老虹梁木鼻に海老頭を型どるユーモラスな建物である。水引虹梁は猿頭であるが、棟札は「犀頭」とある材は杉で、外部のみ極彩色を施す。

石の間は拝殿と規模形式は同じで切妻造り妻入りである。両側面は後端の間を本殿との造合いへ引込む形式の戸を、その他は腰壁引違い戸を構える。境の中央間を格子嵌め殺しとし、両脇間には格子戸片引きをたてる。それぞれ内法長押を付けるが、背面中央間のみ付けずに木鼻を飾る。床は板張りで、天井は化粧天井である。

桜井神社本殿は正面3間、側面2間、入母屋造りで、半間の造合いを挟んで石の間の背後にたつ。そのためか正面中柱は半円柱、両端柱は外側が角で、内側4分の1が円を造り出し、他の柱は面取り角柱という珍しいもので、それぞれ切目・内法長押・頭貫で固める。四隅の柱頭には三斗・杵肘木を、中柱上に舟肘木を置く。中備は正面と背面の両脇間を除いて墓股を配す。妻飾りは木連格子である。背面柱筋は板脇障子をたて、背面を除く三方に擬宝珠高欄付切目縁を付ける。正面中央間は格子戸を嵌め殺し、

両脇間には片引き格子戸をたてる。また両側面前端の間に片壁片引き戸を、右側面後端の間の腰壁に片引き戸をたてる外は横板壁とする。内部は造合い及び石の間より2尺程高めて床板を張り、化粧屋根裏を見せる。材は拝殿同様杉で、横板壁、斗栱、臺股などに彩色を施す。建立年代は拝殿同様寛政10年(1798)である。

ところで、拝殿と本殿の間には半間の造合いがあるにも拘らず、屋根形式は本殿の入母屋造に拝殿の入母屋が直接接続しており、平面形式上も拝殿と本殿、及び造合いは同一幅である。このように拝殿と石の間、石の間と本殿の間に結界や造合いを付けることや本殿の床を高めていることなどはやはり密教系本堂を想わせるものがある。

また本殿は拝殿が雨葛に切石2段積み基壇上にたつのに対し、2段積み基壇上にたち、相違を明確に示す。この本殿は中備の臺股も彫刻もなく簡素であるので、覆屋としての要素が強い。事実、内部に安置されている宮殿は寛政10年(1798)の趣を十分そなえた立派な建物である。

宮殿は正面に板葺を吊り、左側前端の間に板唐戸をたて、切目縁を切り込んで木階を付ける。身舎は円柱に切目・内法長押、頭貫を廻し、柱頭に平三斗を組み、正面と背面のみ中備に臺股を配す。妻は虹梁臺股である。

向拝は面取り角柱で、水引虹梁を渡し、連斗を用いない連三斗を組み、臺股を中備とする。妻飾りには懸魚や桁隠しがなく、簡素に見える建物であるが、浜床に八角柱の擬宝珠高欄を付けるなど、非常に丁寧な仕事がなされている極彩色宮殿である。

小結：以上、榎原神社と社殿撰社桜井神社社殿から頭取大工小八重平兵衛道義の作風をまとめると次のようになる。

#### A、拝殿

- 1、雨葛切石2段を用いる。
- 2、大面取り角柱を用い、切目長押、内法長押で固める。頭貫では、本社の場合正・背面を虹梁型になるのが違いである。
- 3、組物は拳鼻付平三斗、中備に本臺股を配す。
- 4、妻飾りは木連格子。
- 5、向拝は石造礎石より礎盤を造り出す。
- 6、向拝柱は几帳面取り角柱に、水引虹梁を渡し、海老虹梁で身舎柱を繋ぐ。
- 7、向拝、大斗に皿斗を用い、中備は本臺股(伊東公の庵木瓜紋)を配す。

#### B、石の間(造合)

- 1、中備の臺股(庵木瓜紋)以外、床の拭板張りぐらいで共通点が少ない。

#### C、本殿

- 1、中備の本臺股(いほり木瓜紋)以外、床の拭板張りぐらいで共通点が少ない。

#### D、榎原神社本殿と桜井神社宮殿

- 1、中備は本臺股(庵木瓜紋)を用いる以外、床の拭板張りぐらいで共通点が少ない。しかし、拝殿と宮殿向拝は、几帳面取り角柱、水引虹梁、海老虹梁など共通点は多い。

#### 【注】

1) 拙稿「榎原神社社殿(本殿)の彫物と工匠」(『デアアルテ』第5号 平成3年5月刊)

『宮崎県近世社寺調査報告』(宮崎県教育委員会 1981年3月刊)

## 第2章 大工松浦藤右衛門の作品と作風

榎原神社は宮崎県南那珂郡南郷町榎原に鎮座する。社殿は寛政10年(1798)の建立で、その置札が残る。そこに「大工松浦藤右衛門」の名が記載されている。

同県北郷町北河内字宿野に鎮座する潮嶽神社社殿の天保3年(1832)の棟札に「大工頭取松浦藤右衛門」と記す。従って、大工松浦藤右衛門は榎原神社社殿建立時に大工として「頭取大工小八重平兵衛や盛大工比江嶋空治、河野次左衛門、合番匠比江嶋駒治」のもとで仕事をし、34年後の天保3年(1832)に大工頭取として、潮嶽神社社殿(拝殿・幣殿・本殿)の造営をしている。

榎原神社社殿は拝殿、石の間、本殿が1体になった権現造の建物である。これら全体が、寛政10年(1798)の建立で残る。また、潮嶽神社社殿も当該建物が残る。そこで、榎原神社社殿と潮嶽神社社殿を比較して、大工松浦藤右衛門の作風を検討する。

#### 1、榎原神社

榎原神社社殿は、屋根については八幡造の影響が大きいと思われるが、拝殿・石の間・本殿(宮司の呼称による)が一体となり、棟を「エ」字形に造るいわゆる権現造社殿の形式を呈する。

社殿の構造形式は拝殿が正面5間、背面3間、側面1間、入母屋造り、千鳥破風付き、向拝1間、唐破風造りである。石の間が拝殿と本殿に接続し、正面3間、側面1間、切妻造り、妻入りで、左右に庇が付く。本殿が石の間に接続、3間社両流造り、いずれも銅板葺き、極彩色である。

当社の拝殿は雨葛に切石3段積みの基壇上にたちつ。身舎の大面取り角柱は切目・内法長押、頭貫(正

面中央間と背面は虹梁型頭貫）で固める。組物は拳鼻2段付き平三斗とし、臺股を中備とする。中備の臺股は正面東より「一文字」「庵木瓜」「九曜文」「庵木瓜」「九曜文」、両側面は「庵木瓜」「九曜文」で、いずれも伊東家の家紋である。因に、組物に特色が見られ、後に記すように内側出組で、実肘木内側に拳鼻を付け、外側は実肘木、杵肘木とも頭貫木鼻と同じ絵様線型とする。両端では大斗上の45度振った肘木外側を絵様線型とする。軒は2軒、角・繁垂木で、妻飾は木連格子である。正・側面には擬宝珠高欄付き切目縁を設ける。正面中央間は戸納めを付けて舞良戸を引き込み、両脇・両端間は腰に彫物両端間は龍身を頭を向って左側は下に「ア」、右側は内側に向け「ウン」である。両側面は舞良戸引違い、背面は格子戸引違いとする極めて開放的な建物である。内部は内法長押を廻し、床は板張り、天井は中央の両脇間はそれぞれ龍身と雲を描く吹き寄せ棧を付けた舟底天井とし、出組で廻縁を支える。

向拝は礎石から礎盤を造り出した上に几帳面取り角柱をたて、水引虹梁を渡し、柱頭は連三斗（大斗と連斗は皿斗）を組み、臺股を中備とする。手挟付きで手挟は内側が菊花で外側が牡丹花である。臺股は「庵木瓜」である。肘木には水線がつく。身舎柱とは海老虹梁で繋ぐ。その虹梁木鼻は足が2本付いたお化け（後に記す「牡丹鼻」と呼ぶ）のようであったり、菖蒲桁の内側先端にユーモラスな龍頭を付けるなど、かなり賑やかな趣をもつ向拝である。菖蒲桁は水引虹梁上に皿斗をおき、杵肘木を長肘木とし、向拝柱筋より二斗内側で支えられている。

石の間は、正面角柱、背面円柱で、それぞれ拝殿の背面柱、本殿の正面柱となっている。両側のみ切目長押を付け、内法長押と虹梁型頭貫を巡らす。柱頭に出組斗栱を置き、格天井の回縁を支える。そのために、大斗上に45度の肘木を組み、先端に鬼斗を置く。中備は臺股（正面は拝殿の背面と同じ、両端は唐草文の臺股の彫刻。背面は東より「九曜文」「庵木瓜」「九曜文」である）である。

内部は内法長押を巡し、各柱を繋虹梁で結ぶ。床は拭板敷き、天井は格天井である。中央部は鏡天井として「九曜文」紋を描く。格天井は絵入りで、斗栱など極彩色である。繋虹梁上には中央に出組、その両側に内側は「庵木瓜」紋、外側は九曜紋付き臺股を配す。正面の板支輪は綾形紋、その他は菱紋などを描く。正・背面はそれぞれ拝殿背面、本殿正面に当り、格子戸引違い、両側面に舞良戸引違いをたてる。

さて、本殿は切石3段積みの基壇上にたち、身舎

の円柱（床下八角柱）を切目・腰・内法長押、頭貫で固める。切目長押と腰長押は背面のみ小脇柱まで延びている。組物は出組で、中備に臺股（正面は石の間背面と同じ、両側は前端間も後端間も外側「九曜」紋、内側「一文字」紋、）を配す。軒は2軒、角繁垂木とし、妻飾は二重虹梁に斗・実肘木、破風打合せに彫物（牡丹花）の懸魚を吊る。虹梁間は「庵木瓜」文付き本臺股である。両側は高欄付き切目縁が付く。脇障子は東西とも虎を彫り、背面は竹を描く。竹の節は「青海波」に「庵木瓜」文を付けるが背面は東側は「九曜」文にし、西側は表側と同じ「庵木瓜」文である。正面に格子引違いを、右側面前端の間に定木縁付き観音開き片引き戸を、左側面前端の間に片引き戸を各々構える以外は横板落し込み壁とする。

内部は内・外陣に分かれ、床は板張りで内陣を框1段高め、天井は格天井仕上げとなっている。内陣は横板落し込みで3つに仕切られ、それぞれに宮殿を安置する。内陣各柱は虹梁型頭貫を付け柱頭に出組を置き、中備に臺股（正面「剣花菱」紋でこれは竹田氏の家紋らしい。内陣間仕切りの臺股は「一文字」紋である。）を配す。内・外陣境に建具はない。柱頭より上部は極彩色が施されている。但し、天井板は白色、格縁は黒色である。

本殿は両流造である。しかし、屋根が本殿・石の間・拝殿と1体となっているため、それのみを見ると権現造によく似ている。しかしながら、内部形式の点から眺めると、拝殿から本殿まで正面の幅が同一であり、拝殿が舟底天井、石の間と本殿がそれぞれ結界を設けた格天井仕上げでかつ床の高さも本殿の奥の間のみ框1段高くする手法をとるので、密教系本堂や古代の双び堂をも連想させるユニークな建物である。この一連の建物は寛政10年以降、拝殿擬宝珠金物銘に「天保十三壬寅年極月 富寺第十五世良阿代」と見えるので天保13年（1842）及び明治21年（1888）、同40年（1907）、昭和4年、同48年などに修理が行われている。<sup>1)</sup>

## 2、潮嶽神社

潮嶽神社は、『日向地誌』に「北川内神社」として、次のように記す。<sup>2)</sup>

村社宿野ニアリ社地2段3畝18歩火闌降命ヲ祭ル舊稱ヲ潮嶽大明神ト云村内元別ニ七座ノ村社アリーハ川上大明神ト云田代ニアリーハ大木大明神ト云黒泥田ニアリーハ小鳥大明神ト云宿野ニアリーハ三鳥大明神ト云阪本ニアリーハ書野大明神ト亦書野ニアリーハ山ノ神ト云平佐ニアリーハ加茂大明神ト云男山ニアリ明治5年

壬申悉ク遷座シテ今ノ名ニ改ム例祭元11月上  
卯ナリシカ明治6年癸酉以来ハ一定セス

『宮崎縣史跡調査』も

北郷村大字北川内、字潮嶽に鎮座し、火闌降命、  
彦火々出見命、火明命を祭る、創立の年月詳か  
ならず正保中、飢肥藩主伊東祐之造営・明暦3  
年丁酉同伊東祐實再興・現在の社殿は、天保3  
年壬辰、同伊東祐相にして、拝殿は、明治32年  
改築にかゝる、もご社領五石の寄進あり。

と記し。<sup>3)</sup>『日向地誌』を引き、さらに『日向五郡八  
院舊元集』を引く。

#### 潮嶽権現

此地火闌降命の舊跡を傳ふ、大塚、礎石、檜木  
山、神ノ池、饗ノ簸、般子山、般巖、越潮山、  
潮越、魚見瀧等是なり、按するに、火闌降命を  
奉神せる神社は、當社のみにして、(大隅國分  
鹿兒島神宮の如き相殿に祀れるはあり)尚ほ古  
傳の尋ぬべきものあり。

當地方の慣習。

- 一、潮嶽部落に於ては、婦女子、古よわ縫針の  
貸借を禁ず、
- 一、産兒初參の時、額に必ず紅を以て、犬とい  
ふ文字を記し、參詣するの儀あり、驚風病  
の禁呪ご稱す古歌に。

みどり子の額の髪をかき分けて

犬といふ字は弓の矢のはず

按するに、太古火闌降命の、宮廷奉仕の儀禮に  
依りたる古俗なるべし。

(此項社掌佐師正美氏<sub>ニ</sub>依<sub>ル</sub>)

『日向國神新史料』は明治39年「神饌幣帛料ヲ供  
進スヘキ神社」としてあげ、<sup>4)</sup>『北郷町史』は佐師宮  
司提出の資料として、<sup>5)</sup>

当社ハ伊東藩主代々ノ崇敬ノ杜ニシテ報恩公飢  
肥拝領後、杜祿ヲ附シ毎年大祭ニハ大刀一口並  
二幣帛料若干ヲ供セラレ、明和7年6月2日神  
殿改築費銀177文ノ奉納アリ。ソノ前後度々改築  
費奉納アリシモ明カナラズ。

杜祿50石並二掃除方一戸扶持米1斗3升ノ田地  
アリツモ明治維新ノ際、悉ク廢セラレ村社ニ列  
シ神饌幣帛料供進ノ杜デア<sub>ル</sub>。明治以前ハ潮嶽  
大権現ト云ヒ日向三権現ノ一に數エラレテ  
イル。境内地ハ3段6歩。氏子約500戸。

と記す。祭神は火闌降命、彦火々出見命、火明命  
の3柱である。

『宮崎県神社誌』は、次のように記す。<sup>6)</sup>

天孫瓊瓊杵尊と木花咲耶姫との間に生れられた

のが火明命、火闌降命、彦火々出見命(火遠理  
命ともいう)の三皇子で、海幸彦である火闌降  
命が山幸彦の彦火火出見命と争われたとき、満  
潮に乗り巖船で流れ着き上陸されたという伝説  
に基き、潮嶽の里という。ここの宮居で国内を  
治められ、崩御されたあと潮嶽川上の陵に葬つ  
たところを潮塚(王塚)というなど、他にも旧  
跡地が伝わっている。

『県史蹟調査第六輯』によると、創立の年月辞  
かならず、とし、正保中飢肥藩主伊東祐久が造  
営、明暦3年(1657)同伊東祐実が再興した。  
現在の社殿は、天保3年(1832)同伊東祐相が  
造営し、拝殿は明治32年の改築で、社領玉石の  
寄進があったという。

『日向地誌』によると、旧称を潮嶽大明神とい  
い、黒泥田の大木大明神、宿野にあった小鳥大  
明神、阪本の三鳥大明神、昼野の昼野大明神、  
平佐の山ノ神、黒山の加茂大明神をことごとく  
遷座して、明治5年潮嶽神社と改めた。明治40  
年2月、神饌幣帛料を供進すべき神社に指定さ  
れた。

火闌降命は隼人の祖となつたともいわれ、主  
祭神に命を祭るのは当社だけという。特殊神事  
としては、毎年2月11日に、豊作を祈願する福  
種の神事(稲の種子まき初めの祭)が行われ、  
古来、土地の慣習として縫い針の貸借を禁じて  
いる。海幸、山幸の伝説に起因しているという。  
また産兒の初詣には、幼兒の額に虹で「犬」の  
字を書く。これも子供の病気を封ずる禁呪とい  
う古歌に「みどり子の額の髪をかき分けて犬とい  
う字は弓の矢のはず」というのがあり、祭神が  
宮廷に奉仕された儀礼による古俗だろうとい  
う。

潮嶽獅子舞は出雲流の系統といわれ、著名  
で町指定民俗文化財となっている。

当社の創建については詳ではないが、正保年中  
(1644~1648)に飢肥藩主伊東祐之が社殿を造営し、  
明暦3年(1657)には伊東祐実が再建した。以前は  
社領5石で、潮嶽大明神と称していたが、明治5年  
(1872)潮嶽神社と改めた。現在の拝殿と本殿は天  
保3年(1832)伊東祐相によって建立されたもので、  
棟札が残る。祭神は火闌降命他2柱である。

拝殿は本殿前に、切妻造り、妻正面の渡廊を介し  
て、雨葛1段の基壇上にあつた。柱は全て面取り角柱  
で、切目・内法長押、飛貫で固める。軒は2軒で吹  
寄せ角垂木とする本瓦葺きである。妻飾りは正面が  
木連格子、背面が縦板張りである。正面と背面中央

間は吹き放しで、両脇間は腰壁に彫物を嵌め込み板戸引違いを、両側面も板戸引違いをそれぞれたてる。内部は前より第2柱筋に結界を設けるという珍しい手法を見せ、床は板張り、天井は前端の間が格天井、他は竿縁天井である。背面を除く三方には擬宝珠柱高欄付き切目縁を付け、背面柱筋に脇障子をたてる。

向拝は几帳面取り角柱に水引虹梁を渡し、柱頭には木鼻を根肘木に連三斗（大斗皿斗）を置く。肘木は笹縁付である。手挟みが付く。中備は本墓股で正面「庵木瓜」紋、裏面「九曜」紋でいずれも伊東家の家紋である。向拝柱と身舎柱とは海老虹梁で繋ぐ。水引虹梁木鼻は牡丹花で榎原神社拝殿の海老虹梁木鼻と似ている。

身舎の柱頭に組物がなく、中備もないので、一見簡素に見える。正面両脇間の壁の彫物は雲と龍身の浮彫りで、頭を中央に向き合わせ、「ア」「ウン」とする。立派なものである。正面の擬宝珠金物（木階両脇）銘に「明治三十年十一月新築 社掌佐師可一」とみえ、縁廻りはこの年に修理されたい。

本殿は側面が2間の大型一間社流造社殿で、榻板葺の上に瓦捧鉄板葺の置屋根を付ける。建物は土盛した基壇上に、切石2段を布敷きした上にたつ。身舎の円柱（床下八角柱、上部粽付）は切目・内法長押、頭貫で固め、背面の切目長押は小脇柱まで延びている。柱上には拳鼻付き出三斗を置き、中備に墓股を配す。因に、正面と背面は墓股中央に出組斗拱をつける面白い手法をとる（詰組）。軒は2軒で、角・繁垂木である。妻飾りは二重虹梁に円束である。虹梁間は本墓股（一文字紋）を入れる。背面を除く三方に擬宝珠高欄付切目縁を付け背面柱筋には脇障子をたてる。脇障子は向って右に松、左に笹の彫物がある。正面は引違い格子戸をたて、その他は床上が横板壁、床下が縦板落とし込み壁となっている。

内部は内・外陣に分かれ、内・外陣境には袖壁に坂唐戸をたて、中備に墓股（庵木瓜紋）を配す。残念乍ら内陣は拝見することができなかったが、外陣は板張り床、出組みで回縁を支える竿縁天井仕上げで、壁面が極彩色の絵になっている。左右の壁は、梅と竹、内法長押は向って、左が巻貝に海、右が二枚貝に海、正面は雲文など極彩色の絵様である。材料は柱などが樫である。

向拝は几帳面取り角柱をたて、水引虹梁を渡し、腰長押で固める。柱上に連三斗（大斗と連斗は皿斗）を置く。手挟みが付く。中備は本墓股（庵木瓜）とする。身舎柱とは海老虹梁で繋ぐ。正面木階（6級）の両脇と縁下に唐獅子（「ア」「ウン」の向き合せ）彫物板を嵌めて飾る。また、腰長押の下のはめ

板や海老虹梁の彫物を波浪文紋にするなど各所に「潮」のイメージを出している。尚、昭和23年置屋根修理の記録も残る。平成19年8月も置屋根鉄板の葺き替えをした。

結、以上により、大工松浦藤右衛門の作風をまとめると次のようになる。

- 1、身舎柱が円柱、床下八角形断面で、切目長押、内法長押、頭貫で固める。
- 2、榎原神社本殿の組物（出三斗）に出組を用いる。潮嶽神社本殿は拳鼻付き出三斗。
- 3、中備に本墓股を用いる。（伊東公の「庵木瓜」「九曜」文が多い）但し、潮嶽神社は側面のみに本墓股（九曜紋）を用い、正・背面は詰組にする。
- 4、妻飾りは二重虹梁を用いるが、その上部は、斗と実肘木又は円束で納める。虹梁間は榎原神社本殿は「庵木瓜」紋で、潮嶽神社本殿は「一文字」紋の本墓股である。
- 5、潮嶽神社拝殿の水引虹梁木鼻が牡丹花で榎原神社拝殿の木鼻と類似している。
- 6、榎原神社拝殿の水引虹梁や海老虹梁に波浪文が多い。
- 7、潮嶽神社本殿も榎原神社本殿や拝殿も巻貝や2枚貝、及び波浪文などの海、潮に因んだ文様が多い。
- 8、唐獅子が榎原神社拝殿、潮嶽神社本殿の正面腰板壁に描かれている。
- 9、潮嶽神社拝殿の前より第2柱筋に間仕切り（結界）を設けることは、榎原神社拝殿と石の間との関係と類似する。因に榎原撰社撰社櫻井神社拝殿も間仕切りで拝殿と石の間とする。

#### 【注】

- 1) 『日本建築学会研究報告』九州支部 第47号-3 計画系 掲載を一部改稿する。
- 2) 平部嶮南著『日向地誌』（日向地誌刊行会 昭和41年10月20日刊）
- 3) 『宮崎県史跡調査』第6輯（南那珂郡之部昭和2年12月）
- 4) 『日向国神新史料』（大正13年騰写 宮崎県立図書館所蔵）
- 5) 伊東岩男著『北郷町史』（北郷町役場 昭和40年3月1日刊）
- 6) 『宮崎県神社誌』（宮崎県神社序編刊 昭和63年9月30日刊）

※本稿は、平成19年度文部科学省科学研究補助金（萌芽研究 課題番号19656158）による。

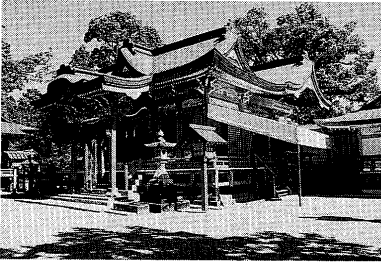
※本稿の一部は最終講義〔平成20年2月9日（土）13:00～14:30、於：8209教室〕に利用した。



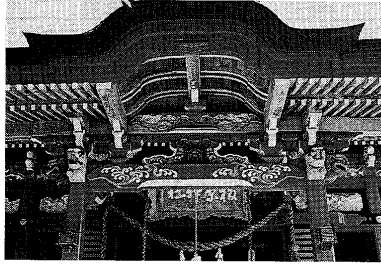


項目	棟物	榎原神社拜殿 寛政10年(1798) 切石雨萬2段	榎原神社石の間 寛政10年(1798)	榎原神社石の間 寛政10年(1798)	榎原神社本殿 寛政10年(1798) 切石雨萬1段	榎原神社本殿 寛政10年(1798)	榎原神社宮殿 寛政10年(1798) 木製土台	潮巖神社幣殿 20世紀初期 雨萬1段	潮巖神社本殿 天保3年(1832) 土盛、切石2段布敷	潮巖神社拜殿 天保3年(1832) 雨萬1段
基礎	礎	大面角柱、切目長押、内法長押、頭貫(正・背中央間虹梁型)	正面角柱(本殿背面柱)、背面柱(本殿正面柱)、切目長押、内法長押、虹梁型頭貫	正面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	円柱(床下八角形)、切目長押、内法長押、頭貫	円柱、切目長押、内法長押、頭貫	木製土台	角柱、足固め、腰貫	円柱(床下八角形、上部縁付き)、切目長押、内法長押、頭貫(極彩色)	面取り角柱、切目長押、内法長押、飛貫
軸部	部	大面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	正面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	正面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	円柱、切目長押、内法長押、頭貫	円柱、切目長押、内法長押、頭貫	木製土台	角柱、足固め、腰貫	円柱(床下八角形、上部縁付き)、切目長押、内法長押、頭貫(極彩色)	面取り角柱、切目長押、内法長押、飛貫
組物	物	大面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	正面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	正面角柱、切目長押、内法長押、頭貫	円柱、切目長押、内法長押、頭貫	円柱、切目長押、内法長押、頭貫	木製土台	角柱、足固め、腰貫	円柱(床下八角形、上部縁付き)、切目長押、内法長押、頭貫(極彩色)	面取り角柱、切目長押、内法長押、飛貫
中備	備	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺	なし	本葺、正・背面	なし
軒	廻	1・角・吹寄せ角垂木	1・角・吹寄せ角垂木	1・角・吹寄せ角垂木	2・角・繁垂木	1・角・繁垂木(向伴2軒、打越)	1・角・繁垂木	1・角・疎垂木	2・角・繁垂木	2・吹寄せ角垂木
妻飾	飾	木連格子	木連格子	木連格子	2重虹梁、斗と享附木	木連格子	木連格子	梁に角束	2重虹梁、斗と享附木	正面木連格子、背面壁板張り
縁高欄	欄	3方擬宝珠柱付高欄切目縁	3方擬宝珠柱付高欄切目縁	3方擬宝珠柱付高欄切目縁	3方擬宝珠柱付高欄切目縁	3方擬宝珠柱付高欄切目縁	3方擬宝珠柱付高欄切目縁	なし	3方擬宝珠柱付高欄切目縁(右は松、左は竹)	3方擬宝珠柱切目縁
柱間装置	置	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み	正面中央間戸納め付舞良戸引込み、両脇間戸に彫物付き舞良戸引込み、背面格子戸引込み
床	床	拭板	拭板	拭板	拭板	拭板	拭板	拭板	拭板	拭板
天井	井	吹寄せ棧付き舟底天井	絵入り格天井	化粧屋根裏	化粧屋根裏	化粧屋根裏	化粧屋根裏	化粧屋根裏	竿線天井	拭板 先端格天井他竿線天井、左右格天井を取り纏らしている。
向拝基礎	礎	石造礎石、造り出し礎盤	石造礎石、造り出し礎盤	石造礎石、造り出し礎盤	石造礎石、造り出し礎盤	石造礎石、造り出し礎盤	石造礎石、造り出し礎盤	礎石	礎石	礎石
向拝軸部	部	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁	几帳面角柱、水引虹梁、海老虹梁
向拝組物	物	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟	連三斗(大斗、皿斗)手挟
向拝中備	備	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺	本葺
彩色	色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色	朱、極彩色
材料	料	杉	杉	杉	杉	杉	杉	杉	杉	杉
大工	工	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門	大工松浦藤右衛門
備考	考									

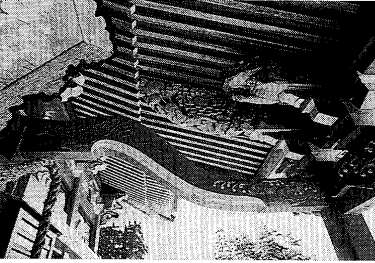
※擬宝珠柱高欄は仏教時跳高欄は神社時。



1、榎原神社拝殿・石の間・本殿



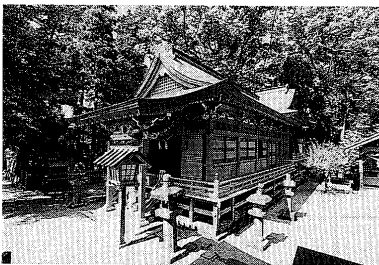
2、榎原神社拝殿正面



3、榎原神社拝殿向拝



4、榎原神社本殿



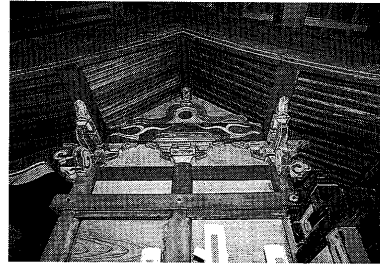
5、榎原神社摂社櫻井神社拝殿



6、榎原神社摂社櫻井神社拝殿向拝



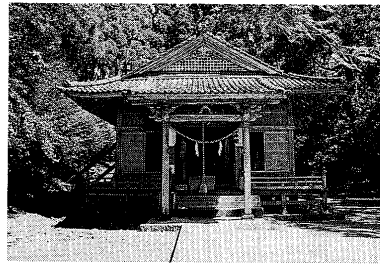
7、榎原神社摂社櫻井神社宮殿



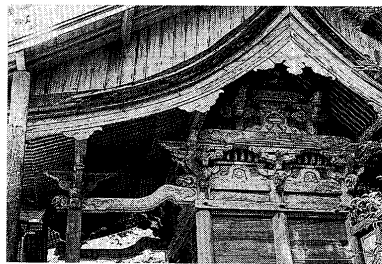
8、榎原神社摂社櫻井神社宮殿妻飾



9、潮嶽神社拝殿・本殿



10、潮嶽神社拝殿



11、潮嶽神社本殿妻飾



12、潮嶽神社本殿向拝